



アートレポート<Report No.387>

カナダ大使館 高円宮記念ギャラリー
 【ジョージ・ラーブ・エッチング展:カナダの自然】
 2008/05/26～08/29



東京赤坂。

青山通りに面したカナダ大使館の中に高円宮記念ギャラリーがあります。いま、ここで、カナダ在住の版画家ジョージ・ラーブ(George Raab)氏のエッチング展が開かれています。カナダの自然を題材にした作品約60点が展示されていて、その幻想的な世界に魅せられました。まるで墨絵のようなカナダの森の絵巻をご紹介します。

ラーブ氏は、1948年フランスのマルセイユ生まれ。トロント大学で美術を専攻し、卒業後シェリダンカレッジとオンタリオカレッジでも美術を学び、その後、オンタリオ州北部の人里離れた原野に数エーカーの土地を購入してアトリエを建てエッチングの制作をしています。大自然に囲まれた制作環境は、森と湖と雪が見せる神秘の世界を作り出すのに欠かせないものなのかもしれません。

まず、私を惹きつけた作品『Catalpa』。雪に覆われた原野に1本の葉を落した木が孤高を保っています。霧に包まれた雪原に黒のアクセントが映える構成で、トリプティック(三幅対)の中央にCatalpaというキササゲ属の高木があります。この作品は、水墨画の屏風のようなではありませんか？構図や質感や全体の雰囲気は、私たち日本人に懐かしさを覚えさせますが、これはエッチングなのです。



Catalpa (triptych) 23 1/4 x 35 inches

エッチング(etching)は、15世紀に考案されたエンブレイヴィング(engraving)を進化させた方法で、銅版に耐酸性の防腐剤(グラウンド)を塗り、その上にニードルで絵を描きます。その銅版を酸性水溶液に浸すと、ニードルで防腐剤が削られて銅版が露出した部分が腐蝕され溝が出来ます。表面にインクを塗りよく拭き取ると、溝にだけインクが残り、これをプレスすると版画になるのです。古くは鉄板や亜鉛版も用い、防腐剤には蜜蝋やアスファルト、樹脂などが用いられます。線の太さは、腐蝕の時間を調節したり、

必要に応じて再度グラウンドを塗ってからまた酸性水溶液に浸すという作業を繰り返すことで、変化させることができます。

ラーブ氏の作品は、このエッチングの技法を基礎にして、後に考案されたドライポイント(drypoint)、メゾティント(mezzotint)、アクアティント(aquatint)という技法を併用し、更に水彩や写真の技法も利用した意欲的なものです。ドライポイントは、金属板を直に彫ったときにまくれ上がった部分に溜まったインクが、印刷時に陰翳をつくることを利用したものです。水溶液を使わないのでドライといいますが、仕上げに微妙な変化をつけたいときによく用いられる技法です。メゾティントは、ロッカーという道具で疵をつけさくれ立ってやすり状になった金属板の表面を、必要に応じてならしていくことでインクの付着する量を調節し、明暗の諧調を作り出します。アクアティントは、乾燥させた樹脂の細かい粉を金属板の表面に振りかけ、それを熱して定着させてから腐蝕させると、樹脂の粉のない部分だけが腐蝕されます。樹脂の粉の量や、腐蝕の時間の変化に応じて濃淡が得られ、広い表面のトーンの差を作るときに用いられます。

ラーブ氏は、このエッチングの基本的な技法に加えて、高感度の写真用モノクローム・フィルムにスクラッチを入れたり墨で直に描いたり、乳化剤を利用した方法を使っているようですが、その方法は私にはよく理解できません。また、微妙な雰囲気や季節感などを出するために水彩絵の具も利用しています。いろいろ試した結果、水彩絵の具が一番適しているそうです。また、最近では、コンピュータを利用して、新たなイノベーションにも挑戦しているそうです。

『Lone Pine』という作品は、今回のポスターに使われたものです。湖を見下ろして1本の枯れた松の木が毅然として存在を主張しています。華やいだ木々ではなく、枯れ木や老木や、孤独に立っている木を、ラーブ氏は好みます。北国の自然の厳しさに耐えて、尚、弱音を吐かずに自己を保つ精神性を表現しているようです。



Lone Pine 17 1/4 x 24 inches

『Mountain River』も、パノラマ的な風景を流れる川に向かって立つ、1本の針葉樹が主役です。鑑賞者は、見ているうちに、いつのまにかこの針葉樹に一体化している自分に気付くことでしょう。まるで、この木になって、カナダの大自然を眺めているような気分になりませんか？



Mountain River 6 1/4 x 9 inches

『Mystree V』というのは、彼の造語でしょう。Mysterious treeという意味でしょうか。神秘的なものを感じさせる命名です。このシリーズにはいろいろな木があって、そのひとつひとつにラブ氏の愛情がこめられているのが伝わってきます。どの作品でも、1本の木を主題にしているものは、その木に注ぐ彼の視線がやさしさに溢れているのを感じ取れます。未踏の原野にいままで誰の目にも触れなかったかもしれない1本の樹木。いま、彼の視線を受け止めた木は、その視線によって存在の意味を与えられたかのように、自然の厳しさを跳ね返す強い精神性を見せています。



Mystree V 5 3/4 9 inches

『Tree Line』は、4枚のモノクロの写真を並べたようで、どことなくレトロな雰囲気をもっています。実際、カナダの自然でありながら、多くの作品がどこか懐かしい雰囲気をもっているのが不思議です。幼い頃よりもっと昔、生まれる前に見た風景、――木々の緻密な写実的表現と霧やブリザードに覆われた幻想的な表現の混在した風景を眺めているうちに、現実と彼の作ったヴィジョンとの境界が曖昧になり、ノスタルジアの世界に引き込まれていきます。



Tree Line 9 1/4 x 34 1/4 inches

屏風に似た形の写真技術を利用した大きな作品も目を惹きました。和紙に印刷した本格的な屏風仕立ての作品を見てみたい気がします。和紙に印刷するのが適しているのかはわかりませんが、彼の表現する世界は、和紙の質感にぴったりのような気がします。

彼の作品は、革新的な技法を意欲的に用いながら、それが自然でさりげなく、それゆえに完成度の高さを感じます。彩色に頼れないエッチングでは、トーンとコントラストと質感が全体のイメージを大きく左右します。一見、制約の多い表現様式であるようでいて、ラーブ氏は、エッチングという技法は無限の可能性を秘めていると言います。彫り込んで腐蝕液に浸け、版が出来てから印刷するまで、作品がどのような姿で現れるのかわかりません。それは、全ての技法の奥深いところから湧き出て来るようなものかもしれません。素材や道具や作り手に内在した何かが、いくつもの工程を経て熟成され、印刷によって姿を表わすものなのかもしれません。それは同時に、自然に潜む神秘の世界を呼び覚ますのでしょうか。どの作品にも漂う静寂は、未知の世界への追憶といった不思議な感覚を呼び起こし、私を魅了してやみませんでした。

ジョージ・ラーブ氏のサイトです。

<http://www.georgeraab.com/>

彼の作品やアトリエの様子などの写真が見られます。

8月29日まで。 土日祝 休館。

開館時間：9:00～17:30 入場無料

----- 尚、
ここに掲載した作品の写真は、ラーブ氏がこのレポートのために掲載を許可してくれた
ものです。I appreciate Mr. George Raad's kindness to have sent me these
pictures for this report.

(All of the images are intaglio etchings with aquatint and watercolour)

Report by 美術館.comレポーター pictor ignotusさん

